

原著論文

- 布村昇:北マリアナ連邦サイパン島産陸産等脚目甲殻類(英文)
布村昇:宍道湖産スナウミナナフシ属(甲殻類、等脚目)の一新種(英文)
布村昇:小笠原諸島母島産ヒメワラジムシの一種(甲殻類、等脚目)(英文)
布村昇:タカベに寄生する *Glossbius* 属(甲殻綱;等脚目)の一種(英文)
布村昇・平内好子:城南公園の落葉下の土壌動物—1
石丸信一・布村昇:高岡市雨晴海岸のヨコエビ
根来尚:富山県氷見市島尾海岸におけるハナバチ相の生態的調査
根来尚:富山県小矢部市の農耕地および大門町庄川河川敷におけるハナバチ相の生態的調査
南部久男・石坂雅昭:北陸地方における明治時代のニホンジカの生息状況
佐藤卓:富山県立山におけるハイマツ、ハッコウダゴヨウ、ゴヨウマツの球果の形成について
佐藤卓:富山県立山におけるハイマツ(*Pinus pumila* Regel)の年枝成長と春季の気象要因との関係

短報

- 布村昇・黒沼春子・八幡昭彦:千葉県流山市産のオカダンゴムシの赤色個体
南部久男:富山県庄川で捕獲されたワニガメ
南部久男:1921年(大正10年度)の日本の狩猟数
上野達也・太田道人:富山県新記録の植物14 常願寺川河川敷産のものを主として
太田道人:富山県新記録の植物15

資料

- 南部久男:石川県における明治時代の鹿・牛・馬の毛皮の統計
朴木英治:富山市科学文化センターにおける酸性雨観測結果
(1998年4月～2000年3月)
朴木英治:雪雲の移動に伴う降雪組成の変化に関する調査結果
(1996年度～1999年度)

原著論文

北マリアナ連邦サイパン島産陸産等脚目甲殻類

布村 昇（富山市科学文化センター）

北マリアナ連邦サイパン島における陸産等脚目甲殻類の研究は行われたことが無かったと思われるが、ドイツのアルシュプラッハ氏からサイパン島で採集した陸産等脚目甲殻類の同定依頼を受けたので、1999年5月に私自身のサイパンでの短期採集旅行を行い、若干の標本をうることができたので併せて調査した。その結果5科6種を確認し、そのうち、4種は新種であることが判明したので、それぞれ

Ligia saipanensis, *Alloniscus saipanensis*, *Alloniscus allspachi*, *Burmonicus bicolor*として記載した。模式標本は富山市科学文化センターならびに、ドイツフランクフルトのセンケンベルグ研究所博物館などで保管される。

宍道湖産スナウミナナフシ属(甲殻類, 等脚目)の1新種

布村 昇（富山市科学文化センター）

島根県宍道湖で採取されたウミナナフシが同定のため科学文化センターにおくられ、研究の結果、新種であることが判明し、シンジコスナウミナナフシ *Cyathura shinjikoensis* として記載された。本新種は福岡県多多良川河口などから知られているキクチスナウミナナフシ

Cyathura kikiuchii との第2触角内肢の先端付近で二股に分岐している点でもっとも類似するが、(1)目を持つこと、(2)第1小顎先端の歯の数が少ないこと、(3)大顎鬚の剛毛数が多いこと、(4)顎脚第2節の長い剛毛を欠くこと、(5)各胸節、特に底節や座節に剛毛の数が多いこと等で区別される。模式標本は富山市科学文化センターで保管される。

小笠原諸島母島産ヒメワラジムシの一種(甲殻綱, 等脚目)

布村 昇（富山市科学文化センター）

小笠原諸島母島境ヶ岳付近のワラジムシの標本が科学文化センターに同定依頼のため送られてきた。研究の結果、この種が *Papuaphilocias* の未記載の種類であることが分かった。本種は沖縄島照首山から知られている *Papuaphiloscia terukubiensis* と最も類似するが、(1)目が存在するもののより小さいこと、(2)第2触角がより長く、第3胸節後半に達すること、(3)尾肢の外肢がより長いことなどが相違するが、雄が未発見であるので、新種を創設しなかった。

タカベに寄生する *Glossbius* 属(甲殻綱; 等脚目)の1新種

布村 昇（富山市科学文化センター）

魚類の口にはウオノエ科の甲殻類が寄生するが、今回伊豆大島沖ならびに東京湾産のタカベの口に寄生していたウオノエが同定依頼のため科学文化センターに送られてきた。調査の結果、本種は新種であることが判明し、*Glossobius arimase*として記載された。この種は小笠原諸島沖産ヒメアカトビウオ口腔から知られている *G. ogasawarensis* と最もよく類似するが、(1) 腹尾節後縁が丸いこと、(2) 体が小さく太いこと、(3) 尾節の両肢が細いこと、(4) 顎脚が狭いこと(5) 第2触角の節がより多いことで相違する。模式標本は富山市科学文化センターで保管される。

城南公園の落葉下の土壌動物-1

布村 昇（富山市科学文化センター）
平内好子（富山県立新川みどり野高等学校）

富山平野の都市的な環境での土壌動物相を知る一環として、富山市西中野町の城南公園の土壌動物を調査した。今回はその第1報として、ササラダニは13種、ワラジムシは3種、ミミズ2種、コウガイビル1種を報告した。

富山県高岡市雨晴海岸のヨコエビ

石丸信一（金沢市野町）
布村 昇（富山市科学文化センター）

従来、富山湾のヨコエビ相はほとんど解明されていなかったもので、潮間帯から水深5m程度までのヨコエビを平成8年に布村が高岡市雨晴海岸で調査を行い、石丸に送った。全ての標本は石丸によって調査され、29種を確認した。今回の標本は富山市科学文化センターで保管される。

富山県氷見市島尾海岸におけるハナバチ相の生態的調査

根来 尚（富山市科学文化センター）

1996年と1997年、富山県西部の氷見市島尾海岸において、ハナバチ類の生態的調査を行なった。同地において、7科19属47種(1177個体)のハナバチ(ニホンミツバチ、セイヨウミツバチは除く)が得られた。種数・個体数ともにコハナバチ科がもともと優勢な科であり、15種498個体であった。次いでコシブトハナバチ科が9種379個体であった。*Lasioglossum frigidum* がもともと個体数が多く281個体であり、次いで *Ceratina flavipes* が117個体であった。採集個体数の約20%がバラ科植物花上で得られ、そのほとんどがハマナス花上で得られた。次いで約15%がキク科植物花上で得られた。

富山県小矢部市の農耕地および大門町庄川河川敷における ハナバチ相の生態的調査

根来 尚（富山市科学文化センター）

1996～1998年、富山県西部小矢部市四日町の農耕地および大門町枇杷首の庄川河川敷において、ハナバチ類の生態的調査を行なった。小矢部市四日町において7科13属23種(654個体)、大門町枇杷首において6科15属42種(599個体)のハナバチが(ニホンミツバチ、セイヨウミツバチは除く)が得られた。小矢部市四日町においては、種数・個体数ともにコハナバチ科が圧倒的に優勢な科であり、個体数ではヒメハナバチ科が次ぎ種類数ではコシブトハナバチ科が次ぎ、アカガネコハナバチが最も個体数が多かった。大門町枇杷首においては、種数・個体数ともにコハナバチ科がもっとも優勢な科であり、個体数ではコシブトハナバチ科が次ぎ種類数ではハキリバチ科が次ぎ、キオビツヤハナバチが最も個体数が多かった。2ヶ所ともにキク科花上で得られた個体が最も多く、小矢部市四日町においては採集個体数の約50%がそうであり大門町枇杷首においては約25%がそうであった。次いで小矢部市四日町ではマメ科、大門町枇杷首ではヤナギ科花上でともに約20%の個体を得られた。

北陸地方における明治時代のニホンジカの生息状況

南部久男（富山市科学文化センター）

石坂雅昭（防災科学技術研究所長岡雪氷防災研究所）

石川県、富山県では現在シカは生息せず、大正末からの狩猟統計にもほとんどあがっていない。能登半島では、明治、大正時代に多くの地域で絶滅したとされる。石川県及び富山県の統計書、民俗関係の文献等を調査し、明治から大正時代の北陸地方のニホンジカの生息状況を調べた結果、両県の統計書等より、鹿皮が石川県能登地方等で1887～1897年の11年間に計4253枚、富山県で1886～1910年の15年間に計935枚生産されたことが明らかとなった。また、文献調査より明治時代の能登半島では冬期に鹿狩りが行われたことが明らかとなり、アンケート調査より富山県西部では冬期に鹿狩りが行われた情報が得られた。一方、1955～1985年の気象観測点の気候値に基づき作成されたメッシュ統計値(旧メッシュ気候値)より、冬期にシカが生息できる最大積雪深50cm以下の地域が能登半島や富山県西部に見られ、明治時代も似たような状況であったと推測された。これらのことから、明治時代には石川県能登半島、富山県西部にニホンジカが冬期を含め周年生息していたと考えられる。その後、ニホンジカは大正時代後半までには石川県能登半島、富山県西部の多くの地域で絶滅し、その主な原因は、冬期の積雪期における狩猟であると推測された。

富山県立山におけるハイマツ、ハッコウダゴヨウ、 ゴヨウマツの球果の形成について

佐藤 卓 (富山県立上市高等学校)

1992年に富山県立山でハイマツ、ハッコウダゴヨウ、ゴヨウマツの球果形成を6月～10月に観察した。受粉後の球果は2.8～4.0mm/月の速度で成長し、その後越冬する。受精後の球果は12.6～16.5mm/月の速度で成長することがわかった。3分類群共に受精後の球果成長速度は受粉後の成長速度より大きいことがわかった。1本のシュートにつく球果の数は受精が行われるまでに2個以上つく割合が減少したのはゴヨウマツで、他の2種は大きく変化しなかった。しかし、受精後の球果では、1本のシュートにつく球果の数は3分類群ともに減少した。

富山県立山におけるハイマツ(*Pinus pumila* Regel)の 年枝成長と春季の気象要因との関係

佐藤 卓 (富山県立上市高等学校)

富山県立山でハイマツの年枝長を1989年に観察し、年枝成長と春季の気温と積雪量の関係を考察した。ハイマツの主幹長の平均値は104cmで、平均年枝長は6.2cmであった。推定された地上部の樹齢は15～29年で、蔵王山や早池峰山とほぼ同じ値であった。しかし乗鞍岳や大雪山より小さい値であった。年枝長の変動は室堂平で観測された3月の積雪量と相関が認められた。重回帰分析では3月、4月、6月の積雪量と6月の平均気温によって大部分が説明できることが明らかになった。

短報

千葉県流山市産のオカダンゴムシの赤色個体

布村 昇 (富山市科学文化センター)
黒沼春子 (千葉県流山市)
八幡明彦 (東京都荒川区)

2000年6月4日、千葉県流山市の住宅地にある空き地で赤いダンゴムシを発見され、この標本が同定のため、科学文化センターに送られた。解剖の結果、オカダンゴムシ、*Armadillidium vulgare* のオスであることが判明したが、赤いオカダンゴムシは初めての報告と思われる。

富山県庄川で捕獲されたワニガメ

南部久男（富山市科学文化センター）

北アメリカ原産のワニガメ(カミツキガメ科)が2000年7月16日に富山県の庄川で山田康幸氏によって発見された。ワニガメは甲長80cm、体重113kgに達し、今回の個体は、甲長24cm、体重4.42kgで、未成熟個体と思われる。ワニガメは、アメリカ合衆国南部原産で、近年、同じ科のカミツキガメとともに、日本各地でペットがすてられ、野外で発見されている。今回の個体も飼育されていたものが捨てられ野生化したものと思われる。

1921年(大正10年度)の日本の狩猟数

南部久男（富山市科学文化センター）

狩猟統計は大正12年度より報告されているが、今回石川県立図書館所蔵の小林毛皮貿易株式会社発行の毛皮年報大正12年(創刊号)に、1921年度(大正10年度)の狩猟数を見出した。農商務省が発表した1府9県のノウサギ、イノシシ、ニホンジカ、キツネ、リス、イタチ、タヌキ、テン、ツキノワグマ、ムササビ、カワウソ、ニホンザル、アナグマ、ニホンカモシカの狩猟数が掲載されていた。現在では絶滅に瀕するカワウソの捕獲数が記録され、富山県では大正10年度に1頭捕獲され、大正末には、富山県にわずかながら生息していたことが示唆された。

富山県新記録の植物 14 常願寺川河川敷産のものを主として

上野達也（上野植物調査室）

太田道人（富山市科学文化センター）

これまで富山県に記録のなかった植物5種を記録した。1998年の建設省「河川水辺の国勢調査(常願寺川)植物調査」で得られた成果の一部である。ネズミホソムギ(イネ科)、オニツルウメモドキ(ニシキギ科)、オオカワヂシャ(ゴマノハグサ科)、ヒロハホウキギク(キク科)、ウスベニチチコグサ(キク科)

太田道人（富山市科学文化センター）

富山県内ではじめて生育が確認された植物を 5 種記録した。また、前報でサデクサとして記録した標本が、ホソバナウナギツカミの同定ミスであったため、この記録を取り消した。

アズマガヤ(イネ科)、オオスズメノテッポウ(イネ科)、ミヤマタゴボウ(サクラソウ科)、オオセンナリ(ナス科)、ナンゴクミネカエデ(カエデ科)

資料

石川県における明治時代の鹿・牛・馬の毛皮の統計

南部久男（富山市科学文化センター）

石川県では現在シカは生息せず、明治、大正時代に能登半島の多くの地域で絶滅したとされる。今回明治から大正の石川県統計書等を調査した結果、明治 21～31 年版にシカ皮の統計がみられた。石川県能登半島の鳳至郡、鹿島郡、羽咋郡と金沢市で、計 11 年間で 4233 枚が生産されていた。能登地方では、耕作物に害を与えるため、駆除のため冬期に鹿狩りを行われたことが分かった。

富山市科学文化センターにおける酸性雨観測結果 (1998年4月～2000年3月)

朴木英治（富山市科学文化センター）

富山市科学文化センター屋上で継続して行っている酸性雨観測について、1998年4月～2000年3月分のデータを報告した。1998年4月から1999年3月までの平均pHは4.99(夏期5.07、冬季4.90)と比較的高かったが、1999年4月から2000年3月までの平均pHは4.77(夏期4.79、冬季4.75)と若干低下した。

雪雲の移動に伴う降雪組成の変化に関する調査結果 (1996年度～1999年度)

朴木英治（富山市科学文化センター）

富山市の北西の風上方向に位置する石川県羽咋市・押水町から富山市に向けて採取した同一の降雪現象による新雪試料中の海塩成分、酸性物質成分の沈着量データをまとめた。